

第5回日中韓建築文化遺産保存 国際学術会議の開催

奈良文化財研究所では、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所とともに、建築文化遺産とその保存に関する共同研究を進めています。2013年度は、第5回となる国際会議を11月13・14日に奈文研でおこないました。

今回のテーマは、「集落・町並みの調査と保存・活用」です。日本での文化財制度の下では、集落・町並みは伝統的建造物群保存地区として保存がはかられ、現在までに86市町村106地区が、国から重要伝統的建造物群保存地区として選定されています。住まいとして生き続ける伝統的な集落・町並みは、さまざまな現代的な要求にさらされています。その保存と活用には、制度的な側面、保存対策を施すための基礎調査、そして地域住民の方々の理解や協力によるまちづくりの活動が欠かせません。そこで、3国の制度、調査方法、保存・活用の取組について発表をおこない、諸活動の問題点を共有し、新たな視点や解決策について活発な討論や情報交換がなされました。

韓国では世界遺産を見据えて精選された8地区が重要民俗文化財として指定されており、それらの保存・活用への取組について発表がありました。中国では歴史文化的名城名鎮名村として350地区が選定され、2013年度の申請は275地区におよぶ申請があったことが報告されました。広大な国土の膨大な数の伝統的集落・町並みへの取組について発表がありました。日本側からは、奈文研で現在おこなっている調査について報告し、亀山市のまちなみ文化財室嶋村明彦室長から、重伝建地区「関宿」の保存・活用の実際について発表していただき、各国の研究者が熱心に聴き入っていました。（都城発掘調査部 黒坂 貴裕）



会議討論の様子

日韓共同研究中間成果発表会

2013年11月8・9日、大韓民国ソウル市の清溪川文化会館において「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間成果発表会」を開催しました。奈良文化財研究所と韓国国立文化財研究所は、1999年に協定書を締結しました。これに基づき数年ごとに共同研究合意書を取り交わし、現在、「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」に取り組んでいます。これまでの共同研究の成果は『日韓文化財論集』Ⅰ、Ⅱとして刊行してきました。今回の発表会は、2011年度の合意書にもとづくもので、研究状況の確認、課題の共有、討議により、研究成果の質的向上をはかることを目的としています。

奈文研からは、馬場主任研究員が「東アジア文字文化研究の深化を目指して」、諫早研究員が「新羅における初期金工品の生産と流通に関する一試論」、小田研究員が「古代日韓における有蓋台付椀の製作と展開について」、廣瀬研究員が「日韓壁画古墳および王陵級古墳の比較研究」と題し発表をおこないました。

韓国側からは、権宅章学芸研究士が「考古遺物にみられる文字記号に関する研究」、李恩碩学芸研究官が「韓日古代馬具製作方法研究」、韓志仙学芸研究士が奈文研の庄田研究員との共同研究成果として「食器と調理器具にもとづく韓日古代都城における飲食文化の復元研究」、申淙宇学芸研究士が「韓日大型古墳空間構造映像化のための物理探査研究」、徐民錫学芸研究士が「韓日古生物遺体比較分析研究」と題し発表をおこないました。発表後には自由討論の時間を設け、発表内容について質疑応答をおこないました。

本発表会では、相互の研究現状を把握し課題を共有するとともに、いくつかの問題について、さまざまな角度から濃密な議論をおこないました。今後の研究成果の取りまとめ、『日韓文化財論集』Ⅲの刊行に向け、大変有意義な会となりました。（都城発掘調査部 清野 孝之）



今回の共同研究中間成果発表会の出席メンバー